

1. 主催者・共催者名

独立行政法人 森林総合研究所、公益財団法人国際緑化推進センター、一般社団法人海外林業
コンサルタンツ協会、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社、林野庁（P）

2. タイトル

REDD+セーフガード：科学的アプローチを基盤とする SIS 開発の取り組みと可能性

3. 目的・概要

REDD+（森林減少・劣化からの排出の削減等）の実施上の主要な検討課題の一つに「セーフ
ガード」がある。これは REDD+の実施により生物多様性や地域住民の権利等に悪影響が及ばな
いようにする対策のことである。これについて各国がどのように対処しているかを報告する仕
組みとして、情報提供システムについても SBSTA において検討が行われている。

本イベントでは、林野庁のセーフガードに関する調査事業についてその概要を公表するととも
に、セーフガードの取り組み事例や評価・報告手法に関する知見を共有し、それを通じて透明
性・検証可能性の観点から科学的アプローチを基盤とした情報提供システム開発について検討
した。

4. アジェンダ

開会挨拶： 林野庁次長 宮原章人

発表1 「事業概要説明」 岡部貴美子（森林総合研究所）

発表2 「REDDセーフガード：UN-REDDによる国別アプローチへの支援」
/ マリア・サン・サンチェス（FAO）

発表3 「プロジェクトデザインにおけるセーフガードへの取り組み」
/ 山ノ下麻木乃（IGES）

発表4 「環境セーフガード確立における科学の重要性」
/ イアン・トンプソン（カナダ森林局）

パネルディスカッション： モデレーター・松本光朗（森林総合研究所）

5. 発表・議事の概要

林野庁の宮原章人次長より開会挨拶をいただいた後、発表1として本サイドイベントの
主催者（森林保全セーフガード確立事業コンソーシアム）が実施する森林保全セーフガー
ド確立事業について、森林総合研究所の岡部貴美子チーム長が説明を行った。

続いて、発表2ではFAOのマリア・サン・サンチェス氏より、UN-REDDによる国別のセー
フガードアプローチの支援、および、セーフガード情報システムへの取組についての紹介
がなされた。国別アプローチとは、途上国はセーフガードに関する政策・法制度・各種規
制を定めつつセーフガードを向上させていくものである。そのアプローチにおいては、SEPC
など既存のUN-REDDのツールなどを用いることができることが紹介され、かつ、UN-REDDの
パートナー国は経済的かつ技術的支援が受けられることが説明された。

発表3では、IGESの山ノ下氏がIGESによるREDD+のPDD分析について発表を行った。土

地所有の形態、森林減少・劣化のドライバー、その対策、地域住民の参画について、27件のPDDの比較分析が行われた。その結果、生物多様性など環境に関するMRVにCCBSを用いているプロジェクトが多いことが明らかになり、環境セーフガードにおいても同様にCCBSを用いることが提案された。一方で、地域住民の参加については、それが単なるセーフガードのチェックリストの項目としてではなく、適切な参加となるように配慮されるべきであることが強調された。

発表4では、カナダ森林局のトンプソン氏が環境セーフガードに焦点をあて、科学的なアプローチに基づくセーフガード確立について発表を行った。まず、科学的なアプローチの役割として、環境を扱う科学の不確実性の軽減について説明を行った。そのうえで、REDD+における森林エコシステムのレジリエンスの重要性を指摘し、生物多様性とレジリエンスの関係性について説明した。最後に、このような環境セーフガードへの科学的なアプローチは、あくまでもREDD+実施に必要とされるものであり、生物多様性の保全と同義ではないということを指摘した。

パネルディスカッションでは、参加者から積極的に質問が出され活発な議論が行われた。REDD+ではナショナルレベル、サブナショナルレベル、プロジェクトレベルと異なるスケールがある。したがって、セーフガードで必要とされる項目も、スケールによって異なるであろうということが示唆された。一方、セーフガードの実施に関するコストがかかるという意見がフロアから出された。プロジェクト実施の際に、カーボンにのみ着目するのではなく、エコシステム全体に配慮すれば、結果的にカーボンの持続可能性が担保され便益が増えることが説明された。また同様に、社会セーフガードに配慮することによって効率的にプロジェクトが実施され便益が最大化されるとの示唆が与えられた。

6. 会場写真

